

詩音

4 特 255

1

841



始



特255
841



海音



題 言

此の「残雪」の一編は、明治三十年の秋に書きしものにてわれの編輯する「文藝俱樂部」に載せたる小説なり。着想平凡文拙劣、加ふるに瑕疵多く、到底瓦礫の伴たるを免れざるもときに平賀工學博士の愛讀を得て、其交友諸君子の間に珍たらんとすと云ふ。まことに慙愧の至なり。

一たびは、修正補刪其拙を少くせんことを思ひ立ちしも、生憎匆忙に日晷と燈火とを消し且つ瓦礫竟に光輝を發するの性なきをさとりて、こゝに磨礪の筆を棄つ。強て回護の辯を揮はゞ過を飾らずしてその罪に座すると言はんか。

明治三十五年十一月

明治三十五年頃老生が大阪府立商品陳列所長時代雑誌文藝俱樂部に残雪と題せる三宅清軒氏の小説を一讀せしところ其文章の言ひ廻し極めて巧妙にして、頗る興味を感じ、これを拔萃して小冊子と爲し友人間に配付した事があるがこれは今より三十七八年前の事である。頃日老生が書齋の整理を行ふ際、残雪の一部を發見せり、此残雪の赤穂義士六郷左源太吉高の事績は我大和民族の真相を顯はすものなるも世間にあまり知られて居らぬやうに思はる其實録の有無は審かならざれども、兎に角誠に面白き文章なれば時節柄更に印刷に付したのである。

昭和十四年四月

平賀義美

残雪の再版に就て

今を去る畧四十五年の昔、八幡製鐵所創立に際し製鋼技術研究のため、第一期派遣生として山崎久太郎君以下我等四名は、獨乙に留學を命ぜられ同地滞在中、計らずも平賀義美先生に拜顔の機會を得て、肉親も及ばぬ恩誼を蒙つたのであります。在獨三年各自其任務を終決し、歸途印度洋上に於て小生は獨乙出發直前に耳内に受けし火傷が中耳炎となり、苦痛一方ならざりしを、山崎君見るに見かねて船内の圖書室より一小冊子を取り來り、枕頭に小生を看護しながら此苦痛を慰忘せしめんものと、反覆其れを朗讀成し呉れたのが即ち、此残雪であつたのであります。爾來小生が義士に興味を持ち終に義士遺物保存館建設に深き關係を持ちし事も、基をたゞせば此残雪が其動機を作つたのであります。其後小生は平賀先生の私宅を伺候せし時に、先生より一書を惠與されましたので見れば其れが残雪であつたので、過ぎし昔の印度洋上の記憶を想ひ出し、うたゝ今昔の感に堪えず、早速之を義道會の會員諸氏に頒賦せんものと決心し、先づ第一着に青軒翁の了解を得たきものと略數ヶ月に互り其住居を探索せしも、遺憾終に是れを發見し得ず、今は已むなく單に平賀先生の同意を得て是れを再版致した次第ならば、幸に讀者諸君の中に於て若し青軒翁御家族の御住居を御承知の方あらば、小生迄至急其住所を御示

教下されん事を先づ第一着に御願ひ致す次第であります。

然らば何故に此書を汎く頒布せんと企てたかと申せば、本來深謀遠慮の大石が萬が一にも吉良を討漏らした其時に如何なる次策を建て居りしものか、識者の胸裡には必ず往來する疑問なれども、歴史は未だ之れを立證する基礎を有せず、故に大石が若し二番手を準備したものと假定すれば、其二番手に當る人物は大凡此殘雪の如き人ではあらざりしかと、青軒翁が想像致されて執筆致されたものか、又は浮世の狀勢時と場合自から埋木に安んじて朽はてる人士の數も未だ必ずしも絶無にはあらざる事なれば、其人々の心を汲んで寓意の執筆をなされたものか、其邊の深意は讀者諸君の判斷に一任し、小生は只、單に恩人平賀先生が往年此書を知友の間に配頒された其深意を推察し、せめては其志の一端なりとも習はんものと今回義士遺物保存館建設の此絶好の機會に於て、殘雪の殘雪を再版に附し同志の間に配布し置かば、幾分なりとも世道人心の上にある何物かの刺激を與へる事と確信し、敢て此舉に及びたる所以であります。

紀元二千六百年記念大祭の日

西宮市甲陽公園

日本義道會本部ニテ

羽室庸之助

殘雪

三宅青軒

(一)

一步は高く、一步は低く、踵々踏々の酔脚眼掛けて、三匹四匹前より後より吠えつく犬を、コリヤ〜喧しう言ふまい、決して怪しいものではないぞ、浪人はして居れど、家は確かにあるもの、ハ、どうぢや、分らぬか、さりとては畜生め、うるさい奴ぢやなと、聲音寛かに叱りながら、寒光すさまじき十二月の星空を仰ぎて、何やら深き思ひ入れ、咬つくやうに吠え廻る犬には何の頓着もなく、ちつと路傍に立止まりしが、忽ち股を袴越しに叩いて、それを拍子に謠の一節「思ひぞ出る壇の浦の、その船いくさ今は早や、閻浮にかへる生死の海山一度に震動して、船よりは鯨波の聲、陸にはなみのたて、月に白むは劍の光、潮にうつるは兜の星のかげ、水や空そらゆくも又雲の浪の、打あひさしちがふる、船いくさのかけひき」と、聲朗かに足も軽く、此處本所の片ほとり、一人の武士は歩み行

きぬ。

執念つきまよふ犬を足に逐ふて、よく送つて呉れたの、此處が自家ぢや、頼むく〜と小門をた〜けば、どなたで御座ると門番のねぼけ聲。左源太ぢや、開て呉りやれと武士の云ふに、へい、こ、これは六郷様、只今明けまする、大層お遅いお歸り、お寒う御座りましてせうと、門を開けつゝ老爺の言へば、ハ、ハ、ハ、此の如くの大酩酊、冷たい風が顔を吹くは、どうも言はれぬ好い心持、寒いなどゝは以ての外、ハ、ハ、併し老爺や、氣の毒ぢやツたの、ウキー、酔ふた、酔ふたと、ひよろつく、足元危な氣に、お危なう御座りまする、わたくしの肩へおつかまり遊ばせと、老爺は駈け寄り、母屋の横手廊架で續きし小座敷へ導きて、御新造様、御歸りで御座りますると小聲で言へば、ハイの聲音もいと確かに雨戸を押明け立出る女、持し手燭に顔白く、其處へ座りて丁寧にお歸り遊ばせと辭儀なしぬ。

ハア、只今歸りました、今晚は例の俳諧で馳走になり、イヤ大層に酩酊致した、ハ、ハ、ハ、殆んど前後忘却、どうして歸つたか存せぬ位ぢや、ヲツと危ない、武士たるものが酒の爲めに轉んだとありては、ハ、ハ、他人の知らぬ所ぢや、外聞に拘はる程のことでも無いが、コレ花枝、手を執つて呉やれ、一向にたわいが無い、老爺や笑ふな、斯んな事は他言

無用ぢやぞ、當時岳父の食客とは言へ、六郷左源太源の吉高、他日主取の妨げになるわいハ、ハ、ハ、ハ、と高笑ひ、其處で一句浮むだが、斯う言ふのはどうぢや、「酔たふり人に語るな冬の月」、ナニ今宵は十二月の朔日で闇ぢやと、これは、これは、しくじつたな。へ、へ、大層な御機嫌で御座りまする、わたくしの頭を月とお見立に相成りますれば、正に結構な句で御座りまする、へ、へ、と老爺の笑へば、ハ、ハ、ハ、老爺は話せるな、自家に居て徒然の砌は附合でも致さう、イヤ面白い、面白い、ウキー、花枝、聞いたか、俳諧と言ふものはなく〜面白いものであらうと、左源太口は達者なれど、ぐたりぐたりと海鼠のやうな酔體いくぢなく、老爺と花枝に扶けられ、大の男は辛うじて座敷へ上りつ老爺や、御苦勞であつた、早く往つて息むで呉れ、ウキー、花枝、水を一杯、はて、この水さしにあるか、萬事氣が付いて忝い、持つべきものは女房かな、ナニ御機嫌様ぢやと、これは、これは、老爺まだ其處に居るか、ハ、ハ、ハ、他人へ話してはならぬぞ、左源太面目を失ふわい、ハ、ハ、ハ、と笑ひながら、茶碗に水つぎ呑干して、ごろりと其處へ肱枕、早や躰かくたわいなさ、花枝はぢろりと打見やり、ほんに旦那様のお酔ひなされた事、老爺や、いつも夜深に起して迷惑ぢやの、これで酒でも飲むで呉やれと、幾等か知らねど繋いだ青ざし出して遣れば、ここれは御新造様、左様なことをと辭退するを、何の、何の、わ

たしの寸志受けて呉やれ、ほんに夜が更けたに、早く往つてと雨戸を閉る椽の端、老爺は平伏し辭儀をして、有難う存じます。左様ならばお息み遊ばしませ。

(二)

其處らの戸締りぢろく、見廻り、花枝は夫の側に寄りて、旦那様、さアお息み遊ばせ、そんな事しておいで遊ばしてはお風を召します。お床はのべて御座んすに、さアくさアとゆり起せば、誰ぢや、誰ぢや、理不盡の事を致すと左源太了簡罷りならぬ、ろ、ろ、浪人は致せども、人に打擲される程零落は仕らぬ、いざと言へば、ナニ拙者の刀がなまくらぢやと、い、いかにも、これは面目次第もない、先祖相傳の貞宗の一刀は、成程恥かしながら賣てのけ申した、はて、野暮なことと言ふまい、酒の爲ぢや、酒の爲ぢや、さ、酒はな、さア其酒はな、天の美祿と御座つて、アラ旦那様、大きなお聲で、外聞が悪う御座んす、そんな寢言を仰しやらずに、もし旦那様と、花枝はぐつと抱き起せば、こ、これは狼籍至極、勝負とあらば尋常に、ホ、ホ、何が尋常で御座んすと打笑ふ。はて、そなたかと、左源太ほんやりねむさうに其處ら眺めて、今何か申したか、フム、貞宗の一刀を、イヤ飛だことを言ふたな、そなたに對しても面目ない、じ、實は、酒の料に賣却致したこ

とゆるに、それが兎角心に掛かつて、寢言にまで左様の事を申したのぢや、ハ、悪いことは出来ぬもの、つい自分から白狀して退けた。エ、それでは、あの、あの、お刀を、本當にお賣り遊ばしたかと、花枝驚き摺り寄りつ、火影ちらつく短檠のもと、ぢつと夫の顔見れば、左源太又もやばたりと轉むで、う、賣た、賣た、生れ付いてのこの猩々、酒がなうては一日も暮されぬ、まして浪々の今の身分、處在なきまゝ、つい酒ぢや。そ、そのお酒を召上るに、お金の御入用があるならば、なぜわたくしへ仰しやりませぬ。

ハ、ハ、さう嚴しく遣り込めて呉れては、こ、この左源太返答に困る、併し花枝、斯く永らくの浪々をうるさいとも思し召さず、いかにそなたに繋がる縁とは言へ、斯して結構にお養ひ下さる岳父御の御高恩、その御高恩を思へば、酒飲む料までとは、さ、花枝、わしにはどうも言出すことが出来ぬ。ナニ、何と申す、刀は武士の魂ぢやと、ハ、其魂を七十兩に賣て退けた六郷左源太、こ、これでは良い奉公口もあるまいな、無ければ以來は俳諧師、六花堂雪香としやれて、浮世を茶にして送る積りぢや、花枝、そなたもちと遣たが好い、こ、今宵も大高子葉がわしに對して、奉公口が有つたかどうぢやと尋ねるからわしは言下に、「ふり賣の士寒し歳の暮」とやつた、ハ、ハ、名句であらう。イヤそれが、大受けでな、其角も大層にほめて呉れた、まア好い。花枝、そなたは兎角武士々々といふ

が、武士ぢやからとて、兩刀を取つて仕舞へば、町人百姓と差別はない、ナニ、先君の仇を、こ、これは飛んだことを言ふ、相手は高家の吉良殿、双向へば命が無いに極つて居る命を失ふやうなことは、左源太眞平ぢや、はて、まだ三十三歳、今死るのは嫌ぢや〜と左源太臥ながらかぶり振つて、大きくしやめを二つ三つ、オ、寒い、寒い、どうやら酒が醒めたらしいに、さらば寝るとしやうか。

のつそり立てひよろつて、これは、これはと自分で呆れて、花枝、そなたも來やれ、今宵は飛んだ眞面目ぢやなと、左源太笑ひながらに寢所へ入ると、ぢつと見送りすまぬ顔、火影に白き富士額、秋湖月沈むで眼睛清く、年は二十を二つ三つ、越路の雪か三芳野の、花にもまがふ美しくしき姿ながら、愁雲一帯眉を閉せる趣、怪しく花枝の心は曇るらし。

(三)

左源太ぼんやり起き出し今朝、本性違はぬ酒の酔ひ、さすがに昨夕のこと恥かしきや、妻の花枝に對する容子の何とやらしよげて、母屋から運ぶ朝飯の膳に向ふても、どうやらいつもの元氣はなく、どうも夜前は、大層に酩酊致した、定めて尾籠なことを申したであらうに、赦して呉やれと、夫れとなく、妻の花枝へ詫言しつ、それ、それ、今朝は神田ま

で行ねばならぬ用事がある、實は奉公口を頼むで置いたことに就て、何れ歸宅は夜分であらう、何分頼むと獨言のやうに言ひて、食事もそこ〜衣服更め立出る。

黒木綿の紋付に木綿瀧縞の袴、黒漆鞆の大小落しざしにして、すらりと高き身のたけ筋肉緊て堅く、蒼白の面、輝く眼、何とやら沈鬱の容貌凄く見ゆれど、きつと結びし口元に一種の愛敬ありて、あはれ威ありて猛からぬ一箇の武士、今しも送り出る妻を見返り、頼むと一言、悠然として門を出れば、朝風そよと鬢を吹て、總髪の後毛朝日にきらめきぬ。

妻の花枝は、其後姿ぢつと見送り、ひそめる蛾眉に思ひの浪のたゞひつ、心の海やいかならん、部屋へはいつて火鉢の側、思案に暮れ居る引戸の外、廊下を歩む足音聞えて、御新造様と先づ戸の際で聲掛けるは、母屋の侍婢小露と云へる少女なり。

アイと應ずる花枝の聲に、小露は戸を明けかしこまり、お早う御座りまする、御機嫌宜しうの挨拶も四角く、旦那様が召しますると云へば、ハア、今日はお非番ぢやに、もうお眼覺めになつたか、直ぐ參らうと、花枝は姿かい繕ひ、其まゝ立て廻り椽、ぐる〜あるいて父の居間へ行けば、父の神川正右衛門利金、今年六十の老體ながら、武藝で鍛ひし岩丈男圓く赤い顔、つや〜として、見るからが元氣よげに、オ、花枝、早いな、機嫌はどうぢや、左源太殿は、もう出られたか、昨夜はえらい勢ひぢやつたの、ハッハッ、あれ位

の元氣がなくては、イヤもう小氣味のよい人ぢや、酒に亂れやうが狂はうが、きまるべき時にちやんとしまれば、男はそれで好いものぢやに、近頃は士風が一體に柔弱になつて、行儀ぢや、作法ぢや、何ぢや箇ぢやと、外見ばかり、肝心の魂は、丸で豆腐のやうな武士の多いには困る左源太殿は、江戸詰の士にも似合ず、あの通り武骨ぢやが、其代り生白くて、柔かで、押せばぐしやりと潰れる豆腐士とは違ふ、ハツハツハ、ナニ、俳諧を、左源太殿は俳諧を好まれるか、それは一段と面白い、俳諧を好まれるからとて、決して柔弱とは言はれぬ、わしでさへ茶の湯をやる時節ぢや、ハツハツハ、小人閑居して不善を爲す、徒然の砌は俳諧でも茶の湯でも、おのが好める遊びをするがよい、フムさそぢや、先刻釜を掛けて置た、久しぶりぢや、そなたの手前で一服飲まう、花枝、頼むぞと、正右衛門つと立上る。

機嫌を窺ふ挨拶も、父が快活な能辯に、どうやら叩き消されたやうで、花枝今更言ふしをなく、われながらきまり悪さに獨で笑ふて、父の後から随ひ行きつ、風流瀟洒の四疊半松風響く茶室へ入れば父がお客で娘が主、主客の坐位も定まりて、花枝は帛紗取上げぬ。

(四)

今一服と父の所望に、花枝は再び茶を點じ、作法正しく父の前へ置けば、正右衛門快氣に飲ながら、さて花枝と聲音重く、他聞を憚る密事ゆる、茶に託して此處に呼入れたのぢやが、豫てそなたに話した復讐の一條、愈々其時節が來た容子、左源太殿に別れるも、最早や近々と存するに、構へて尾籠な振舞すな、まだ幼少の頃に母をうしない、わが手一つに育てられたそなた、其ゆるか兄の六郎よりも、わしはそなたが不便でならぬ、さ、そ、その不便さに、餘計なことまで世話をやくが、必ず共に不覺の歎きに取亂して、人に笑はるやうな事して呉れな、さすがは左源太殿の妻、正右衛門の娘と賞められて呉れ、和漢に例の無い義士の妻となつたは、そなたの仕合せといふもの、花枝、よいか、頼むぞとさすがに脆き老の意氣張、子ゆえに落す一滴、膝に涙の珠なせり。

エ、と驚く花枝の顔は、見る／＼蒼くさびれ行き、父の涙に誘はれて、膝にはらはら雨なしつ、ハイ、ハイ、それは覺悟して居ります、併しお父様、其復讐の一條が近々の中とは、ど、どうして夫を御存じで御座んす、此頃の夫の素振、實はと聲をふるはして、なか／＼そんな容子は見えませぬ。フム、どんな容子と、言葉鋭く斬込まれ、ハイ、そ、それはと花枝どきまぎ言句に詰りつ、いかに生の父なればとて、現在夫の不行跡、エ、何として言はれよう、まして一子相傳貞宗の一刀、武士の魂を酒飲む料に賣つたとは、何と

して、何として、言はれやう、只御酒計り飲んでと僅かに言へば、ハ、ハ、ハ、ハ、と正右衛門軽く笑ふて、はて、愚かな事を申すな、左源太殿は、酒に性根を亂すやうな武士では無いわい、國家老の大石内藏介、これは大した人物と聞くが、イヤ左源太殿と比べてどうであるか、年こそ若けれ、智仁勇を備へた天稟の人傑、斯ふ言ふては何ぢやが、小大名の淺野家には過ぎた人物ぢや、夫れ程の器量物なればこそ、數日の後に迫る死別の色を、少しも面にあらはさず、現在妻たるそなたに迄、其容子を氣取らせぬ平氣の振舞が出来るのぢや、イヤ天晴々々と、感ずる父の言葉聞ては、花枝はさすがに心嬉しく、其嬉しさが哀しくて心は空に、しばし涙に暮れ居たり。

正右衛門も眼を瞑り、深き感慨に沈み居しが、やがて言葉を改めて、花枝、近う寄れ、今言ふた復讐の一條、實は朋友の堀内源太左衛門から聞いたのぢやが、大石初め同志の人々、左源太殿も其中に加はり、劍術の門弟が集るやうに表面を繕ひ、折々寄合密議を凝さるゝ趣、して此程の密議では、何れにしても來る十九日までに事を舉ねばならぬといふのぢや、何故と言ふに、十九日の節分過れば、上野介は上杉家の上屋敷へ移轉なし、來春は愈々米澤へ移住との事、さ、斯いふ故障があるから以て、どうでも十九日までに、多分は十四日の夜であらう。十四日は恰も内匠頭殿の命日に當るから。エツと花枝は今更に、驚

く聲音打ふるひ、そ、そ、それでは愈々十四日で御座んすかと摺り寄れば、叱、聲が高い確とした事わしの知る筈はないが、義士等一同の決心は、どうやら夫れと極つたらしい、左源太殿が此頃の動靜、いつも夜更て歸らるゝは、全く夫等の用事であらうに、花枝、妻として左源太殿に待くも、最早や僅かの日數、よく氣を付けるがよいぞ、そ、そして呉れゝも言聞せた通り心の愁へを色にあらはし、左源太殿に氣取られて、未練な女とさげしまれな、葉山家の御内に、さる者ありと知られた神川正右衛門利金の娘、さすがに立派と心に賞めて貰ふて呉れ、よいか、解つたか、エ、そ、その涙はどうしたものぢや、未練な奴めと正右衛門、にらむ眼に露浮きて、握る拳も打ふるへり。

(五)

火の用心の聲寂しく、撃柝の音霜に凍りて、冬の夜靜かに更け行けば、隙洩る風のいとゞ寒きに、花枝は獨燈火の下、夫の歸りを待つ間の手ずさみ、春着の衣にたどらす、針の運びはともすればつまづき勝の心苦しく、エ、此衣縫へばとて、誰れにか見せん我姿、十四日の其後は、身を墨染の衣にやつして、此世を塵と思ひ棄てんに、入らぬ手業と衣がいやり、物尺杖に思案つくゝ胸の中、さるにても今朝程父の語り給ひし復讐の一條、左

源太殿も同志の一人で、愈々夫と極つたことか、夫迄極つたことならば、いかに秘密の大
 事なればとて、只の一言、外ながらの暇乞、謎になりとも、何故仰しやつては下さらぬ、
 奉公口を探しに行くの、俳諧のあつまりへ呼れて行くのと、いつも、いつも、同じやうな
 好い加減なこと言ふて、オ、さうぢや、昨夜の寢言に、貞宗の刀賣たとやら、何故其やう
 に妾を欺して、しばしなりとも其御心を疑はせ、苦しき思ひをさせ給ふ、女でこそあれ正
 右衛門の娘、よしや密事を明し給ふとも、水火の責苦はおろかの事、例へ此身を察の目に
 刻れたとて、いかで口外なすべきや、氣強いばかりが男でなし、エ、怨めしの我夫と賢し
 けれども流石は女、花枝の心は千々に亂れて、處在なきまゝ弄ぶ、絲の紛れと諸共に、も
 つれ紛れて果しなく鐘は上野か浅草か、夜半を告る聲さびて、名残の響きは地に底に、段
 々沈むやうな心地寂しく、さと吹く風の庭を掠めて、松が枝鳴す音の寒さに、花枝はぞつ
 と身慄ひしつ。

折から歸る六郷左源太、今宵も例の酔拂ひ、門番の五平老爺に扶けられ、老爺や、いつ
 も厄介になるの、花枝、今戻つた、ハ、ハ、ハ、 どうもな、酒といふ奴は、ウキー、何
 とも以て妙なもので、ヲツ と危ない、花枝、早く明けて呉れ、そ、そして此手を引張つ
 て、ハ、ハ、ハ、、そうむづかしく辭儀をされては、左源太面目を失ふわい、ナニ衣類に

泥が粘て居るとな、はて、さうぢや、途中で兩三度轉んだから、夫が爲めであらう、花枝
 怖い顔致すな、赦して呉やれ、浪人中は處在の無きまゝ此の通り、やがて仕官を致さば、
 屹度禁酒ぢや、先づ夫れ迄は何事も御免候へ、老爺笑ふな、迷惑を掛けたな、さらばぢ
 や。

言葉も足もしどろもどろにらちはなく、横筋違に座敷へ上りて、ひよろひよろしながら
 寢床へ這入つて、扶ける花枝に身體を任せつ、さながらこんにやくの如き手足力なく、辛
 くも兩刀を脱し袴を脱ぎ去りばたりと、其處へ倒れしまゝ、忽ち鼾聲は雷を爲し、昨夜にま
 さる大酩酊、生體もなく眠りに入りぬ。

餘りのことに、花枝は一向呆れつゝ、今更に夫の品行の頼母し氣なく、父が話しの何
 とやら、疑はれ、若しも此有様が夫の本性にて、よしや同志の人の相談の席へは出るにも
 せよ、夫れはほんの表向、まこと心の中は此通り、あの酒の香の熟柿のやうに腐り果て、
 操の骨は何處へやら、只ぐにやくにやくとこんにやく同様、だらしの無い腰拔武士になつた
 のでは無いか、エ、さりとては氣掛りなと、夫を思ふ一條の、心は迷ふ百條千條、賤の小
 田卷繰返す、思案の結ばるゝ、胸の中こそあはれなれ。

朝疹とく出て夜遅く歸り、歸ればいつも酔拂ひのらちはなく、眞面目な話しする機まがのなきに、花枝の心はにゆるが如く、いかで一言夫の心を引て見て、まこと節義の心堅く、主君の仇を報する同志の中の一人と知れなば、それと言はずも今生の暇乞、夫婦一世の別れの情け、素振になりと名残を惜まんに、夫れも叶はぬ自烈たさ、エ、もう今夜も愚圖酔ひか父の話しを眞實とせば、今宵十一日から十四日までは十二三正味二日の間なるに、さりとては左源太殿の心強さ、武門の習ひ忠義の爲め、是非ないこと、言はゞ言へ、厭きも厭かれもせぬ中の、夫婦妹脊の語らひも、今日か明日かを限りにて、もう會ふこともならぬ切端、それを何ぞや素知らぬ顔、酔たふりの高躰で、何處々々までも妾を欺き、只一言のお言葉もなく、ぼんと妾を出しぬき給ふ思召か。それと言動に知らすなら、嘸や女の愚痴つぽく、歎くであらう、泣くであらうと思し召しての御遠慮ならば、神川正右衛門の娘の花枝、花枝の心知り給はぬ侮り過ぎたなされ方、何れにしても情ない夫の心根と、花枝はそつと枕元、殘燈朧に照す夫の顔を眺むれば、口あんぐりと涎垂らして、何の他愛もなき様あさましく、躰かく度鼻息の、腐れし熟柿の酒の香に、花枝袖もて鼻掩ひ、エ、何とし

た此姿、それでは素知らぬふりも酔たふりもなく、まことに性根は腐つたかと、又今更に呆れ顔、

明れば元祿十五年十二月十二日朝、例に依て左源太ふらりと出行きぬ。出行くときに花枝を見返り、些と用事があつて、一兩日は歸れぬであらうに、夜分も待つに及ばず寝るがよいぞ、して岳父殿にも左様申し上げて呉れ、多分十五日の晩には、歸宅の心得で居るからと、言葉少の挨拶も、花枝に取りては胸に釘、ぎつくり徹へて振り仰ぎ、夫の顔を眺むれば、それと思ふて見る眼のひがみかいざ知らず、どうやら變つた眼の色怪しく、聲音も沈むで聞ゆるに、エ、偕ては、愈々今が一世の別れ、これがお顔の見納めかと、胸一杯に迫り來る、涙は憎や覺悟の堰を、漏れて流れてはらくと膝に珠なすやるせなさ、ハイの返辭も喉に詰りて、出兼る聲を咳に紛らし、ハイ、ハイ、畏まりまして御座んす。それでは、あの、これがと、思はず言掛けはつとして、花枝は心を取直し、御機嫌宜しうと辭儀すれば、左源太きよより其顔眺めつ、其ま、黙つて出行きぬ。

送りて出し椽の端、辭儀したまゝに伸上り、門を出行く後影、見送る花枝の胸の中、豫て覺悟の事ながら、又今更に搔亂れ、亂るゝ思ひのもつれゝて、何處から解て好らうやら、我も分らず獨でじれて、居間へ駈入り火鉢の側、あたりに人目なきまゝに、袖咬しめ

て泣伏しぬ。

(七)

お父様は、あの通りに仰しやれど、左源太殿が此程の容子、毎夜く酔拂ひ、其御酒の料にとて、一子相傳六郷家武道の守と、命にも替へ難いやうに仰しやつた貞宗の一刀を惜氣もなうお賣りなされた御心底、さ、まことお賣りなされたことやらどうやら知らねど、何はともあれ、昔しに變る御行狀、餘りのことに妾も呆れて、左源太殿の御心を凝ひ、お父様のお言葉を信とせざりし罪の深さ、實に、實に、お父様の仰しやる通り、御酒の爲めに性根を亂し給ふやうな我夫ならず、心の奥を御酒に包むで、オ、さうぢや、妾の知らぬことながら、酒は憂を掃ふ玉箒といふに、左源太殿のあの酔拂ひは、其憂を拂ふ爲めであつたか、さうとは知らず心で侮り心で怨みしあさましき、思ひ中に在れば色外に現はるゝとやら、定めて我顔鬱陶しく、萬づしうちに稜が立ち、嘸や無禮をしたであらうに、さうぢや、さうぢや、お父様が呉れくのお言付、妻として左源太殿に侍くも、最早僅かの日數、よく氣を付けるがよいぞとの仰せを忘れて、エ、もうどうしたら好らうやら、旦那様、お赦しなされて下されと、花枝は居間の文机に、凭掛つたまゝ泣き入りつ。

しかはあれ、いかに秘密の大事とて、包みに包み秘しに秘し、一世の別れの今朝までも言葉はおろか素振にさへ、兎の毛の先露程も知らせ給はぬ御心強さ、其御心の強いのが、武士の武士たる御氣象か、さうと思へば嬉しいけれど、其嬉しいが怨めしい、とは言ふものゝ、若しや夫の性根腐りて、あの酔拂ひが本性で、俳諧の席へ列なるの、奉公口を探しに往くのと仰しやる言葉が眞實であつて、復讐の仲間外れ、節義を知らぬ腰拔武士と、人に笑はれ罵られ、そして生きて居給ふとも、妾は何で嬉しからう、千代に八千代にさゞれ石の、いはほ、どなりて苔のむす、其末までもと契りてし、空な契りの夢見草、散り際清き武士の、手本と人に仰れ給ふ果敢なきを、妾は嬉しう思はねば、ならぬ浮世のあぢきなきエ、く、妾はどうしようかと、思ひ暮して夜に入れば、晝のうちよりそば降りし、みぞれはいとゞ降りしきり、風蕭々として易水の、寒き昔しの中から歌も、思ひ出されて物寂く、一たび去つて還らざる、夫の身の上兎や角と、繰り返し繰り返し、絶えぬ思ひに暮るゝ時、それと知らるゝ廊架の足音、父の正右衛門出來りぬ。

涙の痕を見せまじと、花枝は燈火の影に坐し、ふるふる聲音無理に壓へて、お父様、今日はわけてお寒う御座んすに、何處へやらお越しになつたと承りまする、お障りも御座んせぬかと挨拶すれば、イヤく大丈夫、寒垢離取て、夜から劍術で鍛ふた身體、ハツハツ

はなかく障ることではないぞ、案じて呉れなと事も無げに言ふて、時に左源太殿は今朝疾く出られて、出掛けに、十五日まで歸宅せぬとの申置があつたそうぢやが、それに就てと聲音重く、わしは態々堀内方へ参りて、容子いかに承つたところ、愈々十四日の夜九つ時の討入と極つたそうぢや、花枝、悦べ、良い夫を持つた、末代までの武士の鑑、岳父になつたわしも嬉しい、そなたも定めし嬉しからうと、言葉はさしも勇ましけれど、さすがに聲は打ふるひつゝ。ハイ、ハイ、愈々で御座んすか、う、嬉しう御座りまするとうるみ聲。さうと極れば、それでは今朝が眞實の訣別、エ、もう顔は見られぬかと、又今更に哀しさの、胸一杯に湧返り、堪へ兼ねつゝよと泣く、花枝の涙に誘はれて、正右衛門もほろろと、落る涙を拳で拭ひ、う、う、嬉し涙が飜れるわい。

(八)

しと降りしきるみぞれの末が雪となりて、十三日は朝よりの大雪、柳絮鵝毛の風雅のこなへ、巴と飛び散る六の花を、何處のすね者か頭巾の裡から眺めて、いざ共に雪見に轉ばぬ用心の杖を力、實に風流は寒いものと、十七字に首打捨る輩の、其處らうろつく氣樂さに引かへ、花枝は獨物思ひ、思ひ暮して思ひ明しに愈々の十四日、雪晴れ上りて麗朗に

一夜に成りし玉樓銀台、朝日きら／＼とさす美しくしさは、庭の小雀諸聲に、先づ賞め噪ぐ心地よき、神川の侍や下僕等は、邸内邸外彼方此方と雪轉がしに餘念もなく、走り廻りて罵り喚く様可笑しけれど、花枝は愈々打沈み、朝の飯だに喉へは通らず、居間に籠りてぼんやりと盡きぬ思ひに暮れ居りぬ。

朝疾く出勤せし正右衛門、夕刻歸りし其後は、只そわ／＼と落つかず、夕飯さへ碌々喰すに、座敷の中を彼方ら此方らと獨步行て、果ては花枝の居間へ入り來つ、花枝、愈々今宵ぢや、同士の人々が首尾よく望みを遂らるゝやう、神へ祈願を籠めるがよいぞ、わ、わしは、どうも身慄ひがして、氣が落ちつかいでと小聲に言ひて、ハイ、仰せまでも御座んせぬ、わたくしは一心に諸神諸佛を祈りて居りますと、言ひし花枝の返辭は聞ず、又バタ／＼と我居間へ戻りて、燈下に無手と腕差し組み、只默然となし居たり。

漏刻既に五つを過ぎ、やがて四つにもならんとする頃、正右衛門は侍女に命じて、門番の五平老爺を呼しめつ、近う／＼と側へ召し寄せ、偕て五平、其方を見込んで申付ることがあると思ひ重く、偕と五平の顔見詰れば、ハッ、わたくしのやうな者に、恐れ入ります、いかやうの儀にても、この白髪首のある間は、屹度勤めますと、さすがに潔い答へ先づ頼母しく、俯せし頭を少し捲げて、旦那様、どんな御用で御座ります。

フム、頼母しい其言葉、其處を見込むで申し付るのちやが、五平、遠慮に及ばぬ近う寄れ、實は其方も承知の通り、我婿六郷氏の主君淺野内匠頭殿には、去年三月十四日、殿中に於て吉良上野介殿と闘争あり、夫が爲め即日切腹仰せ付けられ、領地はお取上と相成りしが、遺臣大石内藏介初め同志の義士等申合せ、いかで一太刀上野介殿を怨むで死んものと、以來千辛萬苦を嘗め盡し、今宵九つ時を相圖に、愈々吉良殿の屋敷へ討入る趣、容子ありて外方より聽て居る、さ、六郷氏よりは、只一言も聽たことはないが、無論同志の一人に相違あるまい、それで其方時刻を計りて、吉良殿の屋敷近傍へ忍び参り、あはれ義士等が勝負の容子も窺ひ、首尾よく本望遂られた上は、其方六郷氏に面會致し、正右衛門大慶に存する旨、只一言達して呉れ、そ、そして、どんな容子で居らるゝか、天晴勇ましい武者振見届けて來て呉れ、好いか、五平申し付たぞ、大切に勤めよと意外の言葉に、五平驚き、そ、そ、それは、畏りまして御座りまする、六郷様には、成程と、思ひ入れ、常々無禮を致して居りました儀もお詫申上ねばなりません、ハツ、わたくし今年六十五歳、最早餘命も長くは御座りませぬに、此様な御用仰せ付られ、天晴忠義の方々のお顔を拜することの出來まするは、五平生涯の思出、有難う存じますと、感激の涙ほろりと膝に落ちて、左様なれば、これより用意を仕り、時刻を計りて参りまする。

(九)

天高く月小に、今宵十四日の冬の空物すさまじきまでに澄渡りて、積りし雪のきらりと白く輝き、風なき夜の寒さ身に砒するやうに強く、何處の鐘か、甲に響いて音高く聞えて、夜は九つとなりぬ。

百筋千筋紛る、思ひに暮れ居し花枝は、さすがに心を取直し、あの九つの鐘を相圖に夫は吉良殿の屋敷に撃入り、主君の仇を報じ給ふか、あはれ日本六十餘州の諸神諸菩薩、夫等同志の人々の忠義を憐み給ひ、どうぞ首尾よく本望を遂させ給へと、疊に頭にすり付て一心不亂に祈り居る。

正右衛門も居間の中、身體は短檠の下に在れど、心は吉良の邸に馳せて、月にきらめく氷の刃、雪に飛散る血液の紅葉、忠義に凝りし人々が、あはれ勇ましき働きぶりを想ひやり、義心坐ろに動きそめては、身體ぞくぞくと打ふるひ、常に愛する志津三郎、二尺六寸化龍の利刃を刀架より、取來り、すらりと抜いて火影に翳し、ちつと見詰める焼刃の底より、黄金の鱗閃めき起りて、見る／＼水氣立昇らんとするが如き刀身快く、エ、われ泰平の世に生れ出で、鍛ひし腕のためし時なく、撰むで求めし志津三郎、只徒らに腰の飾とな

り居ることの口惜しさ、あはれ此刀を揮うて、彼の吉良殿の如き奸物をと、思はず心氣興奮し、總身の血液は、刀を持てる右手に集り、筋肉自ら力入りて強く、電火水月一閃々、燈下に揮う刀は鳴りて、ソウ／＼發矢と障子に響きぬ。

斯くても正右衛門、心氣の興奮なか／＼に鎮まらず、素より今宵は夜明しと、定めし覺悟の眼少しも疲れず、刀納めて居門を出で、廊下傳ひに花枝のへや、花枝、どうぢやと聲掛れば、花枝も坐つた其まゝに、ひたすら神佛を祈り居る時とて、お父様で御座んすかと戸を明けつゝ、さア、どうぞこれへと坐蒲團取て其處へ布けば、はて、坐蒲團などゝ、そんな贅澤は入らぬ、左源太殿や同志の人々が生死の闘争、義を泰山の重きに比して、命を鴻毛の輕きよりも輕んぜらるゝ其事を思ふては、イヤ斯して居るも勿體ない心地がする、と聲音濡りてほろりとして、ハツハツハ、正右衛門どうも涙脆くなつた、眞逆年の故でもあるまいに、フム、さうぢや、花枝、そなたも知つてゐる堀部彌兵衛といふ老人、あの高田馬場の復讐の時に、安兵衛を婿に取つた元氣な武士の事ぢやが、今年は確か七十歳か七十一歳かであらう、其老體で居ながら、同志の中でも重立つた一人さうぢや、これも堀内源太左衛門から聞いたことで婿の安兵衛が堀内の弟子といふ因縁から、先夜も暇乞に往つて、老後の思出、多年練磨の槍で天晴若殿原に負けぬ働さして見んと、いかにも勇ましい

元氣であつたさうぢや、イヤ今頃は、あの小作りな身體を縦横無盡に働かして嘸若殿原の眼を驚かして居ることであらうに、偕々羨ましいことぢや、ナニ羨む身でこそ幸ひ、羨まれる身になつては大變ぢやが、ハツハツハ、併し左源太殿は、好い時に生れ會はれて、天晴武士甲斐のある最期を遂げられる、花枝、喜べ、わしも嬉しい、末代までも武士の龜鑑となる夫ぢや、はて、今鳴る鐘は四更か、容子を見せに遣つて、わしの代りに一言の訣別を告させた五平が今に歸るであらう、花枝、今宵の吉左右は、やがての後に知れるであらうぞ。

(十)

神川の老僕五平、其身を町人姿にやつして、四ツ時過る頃より屋敷を出で、斯くて忍び／＼に道のあるいて、やがて回向院前なる吉良の邸近く來りしが、雪晴れ上りし空の色物凄きまでに牙え渡りて、冬の夜の月さながら磨すませし鋼鐵の如く、地となく家となく積りに積りし白雪は、満月皚々として晝よりも明るさに、五平其身の忍び場所に困つて、其處らきよろきよろ眺めつゝ、漸くに樹と石との蔭を見付て偕て、兎も角も其處へ潜みつ、容子いかにと吉良の邸中を見渡せば、月と星とに睨まるゝ屋根徒らに白くて、只寂然とし

て何の音もなく、主も家來も今や眠りの眞最中、いかなる夢をや結ぶらん、ア、この極樂の夢今に破れて、血液飛散る修羅闘場、其闘場の現するは、數刻を出ぬ後なりとも、知ら

で熟睡の淺ましき、五平さすがに老人の心強くて、思はず口に念佛を唱へぬ。
きりくると身にしむやうな寒氣強く、五平がたく身を顫はせ、今かくと待居る時、

寒天に響く鐘聲凄く聞えて、夜は九つと更けまさりぬ、偕て同志の人々が討入給ふ時は來

れり、どの道よりぞ寄せ給ふ、人數は凡そ幾許にや、いかなる服裝で來給ふことかと、五

平色々の想ひに、只さへ寒き身の内我知らずわなくと顫へ來て、齒の根も合す蹲る。

遠音ながらも怪たゝましい犬の聲、はたと五平は耳傾け、同勢の寄せ給ひしか、あの犬の鳴聲は、決して尋常の事ならず、眼力の届かん限り、彼方此方と見渡せば、乾坤一白月満る道に、遙に一團の黑影を見出しぬ。偕はと五平ますく胸ぶるへして、ちつと眺むる其中に、黒き影は漸く近づき、其數凡そ四十有餘、總て一樣の裝束したるが、其裝束の珍らしき甲冑にもあらず袴羽織にもあらず、異様の打扮凜然として勇ましきに、被りし兜頭巾の前立物、佩きし大刀の金物、或は提げ或は杖つき、思ひくゝに携へし槍薙刀の光きらくとして星の如く、天にしては月、地にしては雪、月と雪とに相映じて、いとすさまじく見えにける。

凝り成すしや、こ一團の正氣は、歩武整々肅然として進み來つ、今や吉良の館の表門へ押寄せて、先づ要害を眺むる體なりしが、時に一箇の武士馳せ來て、首領と覺しき人に何か告る容子なり。五平は細かに此體見やりて、いかにするぞと思ふうち、表門には十人ばかりの人を残して、餘の人々は總て裏門に廻り行く。

偕は裏門から討入給ふお積りか、其お討入の御容子見届けすば、旦那様に命ぜられしわが役目立す、いで裏門へ廻り見んと、今はなかく怖ろしさも寒さも打忘れ、月さゝぬ影を撰むで、匍匐しつゝ辛くして裏門の見ゆる物蔭へ往き着き、胸躍らして眺むれば、首領は白の采配雪に照して、猛虎一聲月に嘯く聲音強く、時分は好いぞ、掛れくと下知するに、其聲未だ終らぬうち、一箇の武士は走り來て、持し長梯子手早く堀にかけ、木傳ふ猿の身のこなし、するくと堀へ登りて、足場の雪を拂ふと見えしが、やがてひらりと邸内へ飛入ぬ。

續いて一人また一人、同じく梯子を登りて邸内へ飛入りつ、斯くて中より裏門を押開き一人の武士は聲音凜々しく、いざ御入なされと挨拶すれば、首領は、いと快氣に、御手柄と稱美して、先づ門内へ進み入る、同勢十餘人ぞろくと隨ひ入りしが、五平首差伸て門内を窺ひ見んとする時、中よりびっしやり扉を閉ぬ。

斯くて門内何やら物音せしと思ふ間に、表の門を中より開いて、同勢又も二十人ばかり確かに邸内へ入りし容子なり。

五平は其有様をも見届けんと思へど、生憎や雪に映する月光白晝の如く、黒装束の武士彼方此方に、三人五人うろつきて、どうやら見張するらしき體おそろしければ是非なく其處に屈み居たり。

(十一)

天地の沈黙を破り、萬象の睡眠をさまして咄嗟に現じ來る修羅の巷噪がしく、かけやを以て打碎く音、半弓を以て射かける矢叫び、同時に起ると諸共に、大音聲に呼はる言葉凜としてこれは、淺野内匠頭の家臣大石内藏介を始めとして、寺坂吉右衛門に至るまで、亡君の鬱憤を散じ奉らんが爲め、今宵推參致したり上野介殿いさぎよく名乗つて御出あれ、勝負くと言ひながら、戦ひ今や初りぬ。

さして廣からぬ邸内の物音、手に取るやうに外へ聞えて、打合す刃の聲、馳せ違ふ大地の轟き、敵か味方か、彼方にエイの掛聲あれば、彼方にキヤツと叫ぶ聲あり、一刹那、一呼吸、生死の分るゝこの世の地獄、五平身慄ひして聞居しが偕て其中に、六郷様御座るこ

とか、首領は確かに大石内藏介様と覺へたり、あはれ首尾よく本望遂げて、勇ましきお顔を此老爺に見せ給ふやうにと、心に神を念じ居る。

時に隣家なる土屋主税の邸内何やら噪がしく、俄かに高張提灯を立てつらぬ、人の足音夥しく聞えて、何様異様の體なるに、五平大いに驚きて、斯は吉良殿を助ける積りの用意なるか、若し左様ならば由々しき大事と、心ならぬまゝに廻り道して、忍びくゝに表門の方へ往き見れば、土屋家の使者と覺しきもの既に出來りて、門を守る二人の武士に、何事か尋ぬる體なりしが、やがて忙はしく歸り去り、次は本多孫三郎屋敷よりも使者來りて、守門の武士と問答の後歸り去りたり。

いかなる事を問答せしか、五平一向氣遣ひつゝ、片唾を呑むで模様を窺ひ居る折柄、吉良の邸内より大音聲の響き渡りて、これは淺野内匠頭家來大石内藏介良雄を初め寺坂吉右衛門に至るまで、去年三月十四日内匠頭生害ありしを残念に存するより、怨みの一太刀上野介殿へ參らせん爲め、申し合せて、今宵推參致したる次第に御座りまする、御隣家様へ無禮之れなきやう申しつけ、勿論火の用心は專一に御座りまするゆゑ、老人共を其役人と致し、屹度監督致させ居りますれば、御氣遣ひ下さらぬやうと、いと丁寧に斷れば、土屋本多の兩家よりも、御尤の御事に存じまする、火の用心御氣遣ひ肝要の儀に存じますると

の挨拶同じやうにありて、斯くての後は高張提灯の光をも滅し、兩家共に鳴を鎮めて物音無し。

五平は、邸内の物音に心を奪はれ、其身の寒さも打忘れて、勝負いかにと待居れど、丑の時過る頃までは何の容子も分らず、斯くて戦ひの掛聲も太刀打合す音も絶えて、邸内ひっそり鎮まりしに、偕は同志の方々首尾よく本望遂げ給ひしか、さらば外面へ出給はん、真逆に邸内に於て生害し給ふこともあるまじ、繰出し給はゞ、どうでも左源太様に拜謁を請はねばならぬと、居縮みし足踏伸し、凍えし手温めて、五平立出る用意なし居し時又もや吉良の邸内大音聲の響きありて、上野介殿には、いかに命惜しとて隠れ給ふや、三十間の屋敷は、いかなる隅々までも捜しに捜して、捜し出さねば置き申さず、其時憂目を見給ふよりは、只今速かに名乗出、尋常に御勝負あるべし、左兵衛佐殿にも何處に隠れ給ふや、源家の御歴々とも覚えぬ卑怯の御振舞と、激する聲のふるへるは、無念と怒る心の知られて、エ、夫れではまだ本望を遂げ給はぬか、嘸や悔しく口惜しく思し召るべし、南無弓矢八幡大菩薩、何卒淺野様御家臣中の忠義を憐れみ給ふて、早く本望遂げさしめ給へと、涙と共に祈り居る。

(十二)

さすがに長き冬の夜も、東の空の白み渡りて、鐘も響けば鴉も鳴きつ、既に明けはなれんとする時に、忽ち鋭き聲の邸内に聞えて、吉良上野介殿を、淺野内匠頭家來間十次郎光興武林唯七隆重討奉りたりと、續けて三度呼はるに、五平ははつと胸躍り有難や、忝けなや、今こそ本望遂げ給ひしか、さるにても間様とやら武林様とやらの御手柄は、いかに皆々様の羨ましう思ひ給ふことならん、左源太様は、いかにし給ひし、定めて喜び躍つて居給ふことならんに、早く其御顔拜したや、いでわれも用意と、五平やをら立上り、潜みし場所を出んとせしが、屋敷の外を固めし黒装束の武士の、彼方ら此方らと馳せ違ふに、若し怪しまれて捕へられては事面倒と、再び潜みて暫く容子を窺ひ居る。今は邸内歡喜の聲の喧ましく、轟く足音さへも、俄かに元氣づきたるやうに聞えて、どうやら裏門の方へ人數を揃へる體なるにぞ、五平慌てゝ飛出で、眞ッしぐらに裏門の方へ馳せ行きしが、幸ひに誰にも咎められず、今や同勢の押出す時に出會たり。

見れば、行列を三段に立て、真先に槍二筋半弓兩人薙刀二人、其中に老人二人、其次に上野介の首、四方より十人ばかりにて守護し、其跡より大石内藏介にやあらん、一手の大

將英姿颯爽としてあたりを拂ひ、左右に半弓と薙刀とを持せ、其次は十四人にてあとを固めつ。武步整々として押出しぬ。

この四十餘人正氣の一團は、仰いで天に愧ぢず、俯して地に愧ぢず、晴空を望み白雪を踏み、悠々として歩み出る意氣泰山の重きが如く、衣袖斑々の血痕は、あはれ昨宵戦闘の烈しき記念を遺して、颯と吹く朝風に、伽羅のかをりの馥郁と起るは、死せる後まで芳を遺さん心入の優しくも哀しくて、此時既に往來に立つて見物する人々は密かに暗涙に袖を濡しつ、五平は素より感涙に咽びながら、馳せ來りて左源太様はと求むれど、平生に變りし異様の装束、誰れを夫れとも見分けつかぬ自烈たさ、眼忙はしく眺め廻せど、生憎や見物の人數は次第くに加はり來て、右往左往に入り亂れ、押し合ひへし合ひ罵り噪ぐ雑踏に、思ふやうには見届けられず、斯は口惜しや、昨夜より待明せし心盡しは何の爲め、たつた一言且那様の仰せを左源太様へ傳へ奉り、其勇ましい、御機嫌の好いお顔を拜して。われも肩幅廣く喜び勇むで歸らんものと思ひしことなるに、エ、此入らざる見物人の邪魔することよ、其處退け、これはあの方のお一人に用のあるものと罵りながら、彼方ら此方らと狂氣の如くに馳け廻り、行列總て見渡せば、いかにしけん、左源太らしき人は見えす。

(十三)

左源太様の居給はぬ筈はなし、左源太様左源太様と、五平獨言に言ひながら、見物人の間を潜りて、先へぬけ、後へ戻り、血眼になつて狂ひ走りつ、果ては、左源太様と我知らず呼かけて、はつと氣がつき、エ、われとしたことが、萬に一つも左源太様が此中に居給はぬ其時は、わが其時の恥辱のみではすまず、惹て且那様のお名をも汚すことゝなるに、エ、斯う慌てゝは、其人ありとも眼には入るまじ、心を鎮めて徐かに捜し出さんものと、見物人に押れながら、心ならずも附いて往きぬ。山鹿素行が、嘗て赤穂に在りて傳へし一流の陣立、ド、ンドンの太鼓に、步調を正して、斯くて往き往き、其途すがら無縁寺の先きなる酒屋に入り、此處にて同勢小休みし、菰樽の酒を槍の鐙もて鏡を打ぬき、茶碗に掬ふて、思ひくゝに呑む様勇ましきに、この時五平篤と四十餘人の相貌眺めしが、尋ぬる人は見當らず。

一夜眠らで、雪の中に立明せし其爲めに、のぼせて我眼の昏くなりしか、さるにても左源太様の見えぬは不思議く、と五平は小首傾けつ、果は我と我眼を疑ひ始めて、折から立出る同勢をきよきよ眼で眺め廻して、又もやそれに附いて行けば、同勢の武士等は、今

呑みし酒の元氣に、愈々雄威は増し加はり、合間／＼の陣太鼓、ドンドンと進み／＼と一ツ目の橋を越え掛けしが、こゝに百人ばかりの武士橋詰に待受け居て、同勢中の二人の武士を呼び掛けつ、我々共は、堀内源太左衛門の門人共、堀部安兵衛殿、奥田孫太夫殿へお祝ひを申上る、先は御本意を達し給ひ、我々までも悦び存すること御座る、先生よりも宜敷申しますると言へば堀部、奥田の二士は、いと嬉し氣に、これまでの御出で誠に忝けなう存じまする、尋常の事ならば、誰人か斯る身となりしものを音づれ給ふべき、仰せの如く本意を達し、これより上野介殿御首を亡君の墓前へ手向に參りまする、やがて切腹仕れば、此世の御對面は是限りに御座りまする、御序の折柄先生へよろしく、誠に御指南の御蔭にて夜中の働き恥かしからず致しましたと、よく／＼仰せ上げ下さるやうに、御名残は盡きませぬと言ひながら、さすがの勇士もほろりとして、二士は何やら紫の服紗に包みし物を門人に渡し、尙首領に引合して、これは大石内藏介良雄殿と言へば、内藏介は慇懃に、態々の御出、拙者に於ても千萬忝けなう存じまする、堀内殿へよろしくと挨拶し、斯くて川通りへと進み行く。

偕はあの方々は、旦那様の御朋友堀内様の御門人方か、してお二人は、堀部様に奥田様、堀部様は、高田の馬場の助太刀で、世に聞えた名高い御方、成程御相貌の確りした、

實に天晴なお土と、五平われ知らずうつとり眺め入る眼先に、朝日眩ゆく照し來りて、同勢の携ふる槍又は薙刀、或ひは刀の柄などに金短冊のキラ／＼光りて、各々其姓名の記しあるにぞ、フム、これさへ見ればと、急に眼を四方に配りて、一々それを讀みもて行けど六郷左源太源吉高と記せるものは、幾度見てもあらざりき。

雪に凍え、寒さに堪へ、いかに、いかにと氣遣ひながら、昨夕夜半より今朝明方に至るまで、待に待たる其人は居ず。ヤア五平か、よく來て呉れた、ナニ岳父殿の命令にて、昨夜から忍んで容子を見て居たと、それは大儀ぢやつたの只一言、あの方々のやうに、元氣よく仰しやつて下さる其お言葉を頼みの綱、手繰る思ひで待明せし甲斐もなく、斷れて果敢なき氣の張弓、五平がつかかり落膽して、エ、どうした譯で左源太様は見え給せぬ、常々伺ひ奉りた御容子では、天晴忠義なお方と思ふて居たに、若しや夫れでは、あの酔拂ひが御本性、わが思ふた程、旦那様のお見込遊ばした程に、確實した忠義なお方では無かつたか、悔しい、口惜しい、情けない、この事旦那様や御新造様へ申し上げたなら、何とお怒り遊ばすであらう。どれ程お歎き遊ばすであらう。下郎のわれでさへ、エ、この通りに悔し涙がわれ知らず溢れるに、怨めしいは左源太様、何故あの御同勢の中に居ては下さらぬ。アレ／＼あの通りに肩幅廣く、大手を振つて歸る、ア、羨ましい、妬ましい。左源太

様さへ居て下さらば、われも此肩聳し、吹く風切つて一散に、屋敷へ馳けて歸らんものと、五平は立て茫然たり。

(十四)

町人姿に身はやつせど、何處やら違ふ下僕風、ぼんやり立居る五平の顔をきよろきよろ眺める見物人、中にも一人の野次馬は、ツカ／＼側へ寄つて来て、どうも淺野様の御家來で、げせう、服装をお變へなすつたつて居まさア、ハ、ハ、お暇乞でげすか、ど、どなたでげす、今横川勘平様と仰しやる義士の方に、御親類のお暇乞がありましたつけ、本當にわつしは貰ひ泣きをしましたねえ、お前様は、何といふ方にお暇乞をなさるんでげす、ホラ、彼處にもお訣別がありますア、モシ、此方へお出なさい、わつしが路を聞いて上げやせう、お、お前様、人後に引込むで居て泣いて居なすつたつて、向ふ様に分るもんぢやアげいせん、お出なさい、わつしが御案内申しやせうと入らざる深切、職人體の男の袖引くを、わわたしは左様なものでは御座りませぬと振拂ふて。きまりの悪さ恥かしさ、五平は其處に居堪まらず、群集の中へ紛れ入り、エ、偕も口惜しや。

道理を知らぬ職人でも、義には勇むが人の情、淺野様の御家中は豪氣ものと心から賞め

て、われを縁由あるものと、此涙に察して、路を開いて案内せんと言ふと呉れしあの深切其深切は嬉しいけれど、わが此悔し涙を嬉し涙と見違へられた情けなさ、エ、エ、悔しい口惜しい情けない、左源太様は、何處にどうして御座るか知らねど、ようまア平氣で居られるものと、五平は心搔亂れ、只うろ／＼となし居しが、不圖氣がついて、オ、さうぢや、早く歸つて旦那様へ此事申し上げねばならぬ、平生から性急な旦那様、定めて夜前もお休みなく嘸や待に待ていらつしやるであらう。とは言ふものゝ、旦那様には、左源太様を、必らず御同士の一人と思ふて御座るに、われが歸つて、左源太様の御座らぬことを申し上げたたら、其時何と仰しやるであらう。どんな顔を遊ばすであらう、忠義一圖に凝り固まつたあの御氣象、ア、其御容子を見るが嫌ぢや、それに又貞烈な御新造様、どれ程お歎き遊ばすか知れぬに、其お顔を見るも嫌、嫌ではあれど歸らにやならぬ、エ、もうわれはどうしたらと、五平の心亂れて、昨夜からの立すくみ、凍え痺れし足いとゞ重く、さすがに脆き老の心の張弛みでは、急ぐとすれど、思ふやうに歩行れず、これではならぬ、愚圖／＼して居て歸りが遅く、尙御機嫌を損じなば、われも不忠と氣を勵まして無理に歩行て神川の屋敷の門認めし時の心苦しき、五平思はず立ちすくみぬ。さすがに正右衛門は出て居ねど、小侍の金吾、若黨の長助、門の外に立つて居つ、彼方ら此方らと眼を配りて、偏へに

五平の歸りを待居る體、五平認めて胸どつきり、是非なく足を早むれば、長助眼敏く、五平殿かと聲掛けるに、返辭は出すうなづきながら、無理に走りて近づくに、どど、どうであつた、旦那様がお待兼、先刻左源太様の事承つて實は驚いて、今お前様を迎ひに往うとして居るところ、さア早く旦那様へと、手を引くやうに促がされ、五平今は絶體絶命のぼせ上つてさながら夢中、轉がるやうに門を這入れば、正面の玄關、しかも式臺の板門に正右衛門は麻上下、花枝はうちかけ姿、威儀正しく坐り居るが眼にきらめき、エ、これは、平生から物堅い、お二方、禮を正して左源太様の御遺言を聽うと思し召しての御事か、勿體ない情けない、お氣の毒な、其左源太様は同志の中に、御座らぬにコリヤマア何としたものと、吐胸をついてべつたりと土間に坐つた其まゝに、身をふるはして泣沈みぬ。

(十五)

正右衛門は膝進ませ、佶と五平の顔見詰めて、五平、大儀であつた、待兼ねたぞ、左源太殿に怪我は無つたか、何と言はれた、どんな容子ぢや、定めて人一倍に勇ましいことであらう、申せ聞うと聲鋭く、疊掛けての尋問に、ハツと答へて、聲ふるひ、そ、その左源太様はと聲消れば、其左源太殿はどうなされた、女々しい奴め、泣くに及ばぬ、戦死な

されたかと意外の問ひ、今の今まで少しも氣の付かざりし戦死の事、はつと五平は胸に浪左源太様の見え給はぬは、若しや吉良様のお屋敷内でエ、夫れと先刻に氣付いたなら、何とか言葉をこしらへて、人に問ひもし尋ねもし、左源太様の御安否を、糺した上で歸りしものを不念であつたと氣が咎め愈々返辭は出兼て、萬一お戦死なされた事ならば、悔しがつたり怨むだり、主君に等しき左源太様を、縦ひ口には出さずとも、不忠な方と心で侮り、不義士と心で卑しみ、散々心で罵りしわが大罪を何とせう。

千悔萬悟に心は亂れ、五平は總身汗みづく、ハツ申上げます、わたくし好い年を致しながら、深く考へも仕らず、左源太様の御安否を取糺も致さずに立歸りました段は、不念の至り重々恐入ります、どんなお咎めを蒙りましても、申譯は御座りませぬ、併しお引揚の御同勢、大石内藏介様を初めとし、都合四十七名の方々の中には、恐れながら左源太様はお見受け申し上げませぬ、此儀は確かに見届けまして御座りますと、聲はふるへど定めた覺悟に言葉は淀まず、五平きつぱり言切れば、ナニ、な、何と申す、大石氏を始めとし、同勢四十七名の中には、左源太殿は居られぬとな、その居られぬは、戦死なされた譯では無いか、フム、そ、それを糺さず立歸つた、迂濶者めと頭上のいかづち、正右衛門の毗は、見る／＼きり／＼と釣上り、膝に置きたる拳はふるひ、そ、そ、さういふ不念が

あつてはならぬと存するから、其方に申し付けた次第ぢやに、不念の至り不都合千萬、戦死致されたなら知らぬ事、左源太殿が同志の中に居られぬ筈が無い、不埒な奴め、目通り叶はぬ、五平、退れと、いつもの疝癩。昨夜一夜は待明し、今朝曉より上下着して、花枝と共に玄關へ出たり座敷へ這入たり、五平の歸るを待つて待つて、待し甲斐なき良からぬ報知、正右衛門がつかかり氣落し失望して、其失望が憤怒となり、狂ふ心に思はぬ事さへ口走りつゝ、長助、其方急ひで參り、左源太殿の生死の程、篤と聞糺して來い、申しつたぞ急げとばかり言葉棄て、正右衛門荒々しく立上り、居間へ這入てどつかと座し、空を睨むで默然たり。

花枝はさすがに女氣の、總てが何やら夢の如く、何と判断も付ざれど、五平を叱りし父の怒りに泣く眼を上げて、今や悄々と立上る五平の姿打眺め、この大雪の中に、昨夜一夜立明し、そして歸つてあの不興、可愛さうにと涙脆く、五平々々と呼止めて、お父様はそなたも知つての通りの氣早やの御氣象、例の御疝癩が募つてのお言葉なれば、今の御不興はやがてゆりる程に、必らず心配せぬが好い、昨夜は嘸寒かつたであらう、御膳でも喰てゆつくり休みや、ほんに昨夜の容子はどうかであつた、夫左源太殿の生死は眞に分らぬかと優しい言葉で尋ねられ、へい、有難う存じまする、お鑑識を以て大切な御用仰せ付けられ

ました此五平、六十五にもなつた年甲斐も無い不念を仕りました、誠に恐入りまする、併し夜前の模様は斯くく云々、今朝御同勢お引揚の御容子は個様々々と細かに語りて、其皆様のお服装は、とさすが女、花枝に委しく問ひ究められ、五平つくつく考ふれば、兜の前立物に合印をつけて、い組三人、ろ組三人、其他も同じく總て三人づつを一組として、都合十五組で四十五人、首領二人を加へて總計四十七人なりしことを思ひ出し、個様で御座いましたゆえ、左源太様はと言掛くれば、エ、それではお戦死も遊ばさず、其中にも御座らぬのか、たつたお一人別組の筈は無いにと、花枝はちつと考へ沈みぬ。

(十六)

いろは組の勘定で、五平も氣が付き吐息をつけば、花枝は心も心ならず、よもやと思へど、分らぬものは人心、お父様が物堅いお心から、自分の胸で人を測つて、夫左源太殿を何處までも忠義の武士と思ふては御座るものゝ、先日來の夫の素振、何とも合點の往ぬ節多かりしに、それでは同志の仲間外れ、矢つ張りあの酔どれが其本性、俳諧とやら何とやら遊びに耽つて、泊りあるいて御座るのでは無いか、今若黨の長助が安否を糺しに往つたけれど、當にはならぬ夫の戦死、どうやら返辭が氣遣はしい、百歳千歳限りなく、松の齡と

諸共に、いつくまでも榮え給ふを祈る身が、どうぞ昨夜に淡雪の、消えて果敢なくなり居給ふを、願はにやならぬ逆様事、エ、情けなき浮世ぞと思ひ迫つておろく涙、若しも斯うして居るところへ若黨長助が歸り來て、同志の方に戦死なく、同志の中に左源太様は御座らぬと、平生から遠慮のないぶつきらぼう、判然返辭をしたならば、其時妾はどうしよう、エ、氣の揉る、氣遣ひな、其長助や五平等に顔見られるも耻かしいに、エ、もう此處には居られぬと、花枝は卒かに立上り、蹲り居る五平に一言、往つて休みやの聲もふるへて、わが居間指して入らんとせしが、さるにてもお父様はと廊架傳ひに、襦袢引すり行き見れば、正右衛門上下姿儼しく、ちやんと坐つて苦り切り、ぢろりと花枝を眺めだまゝ、物をも言はぬ六づかしさ、花枝どぎまぎ入るに入られず去るに去られず、如何はせんと躊躇を、花枝這入て待てと鋭き言葉。ハイの返辭も口の中、其室の隅に屈み伏しぬ。

折から小待の金吾バタ／＼走りて來て、申し上げます、長助只今歸りましたと言へば、フム、歸つたか、此處で聞う、庭へ廻れと申せ、早くせよとの疇聲に、ハツと答へて走り去る。エ、長助が歸つたか、どんな返辭と花枝の胸、狂瀾怒濤の逆巻で、總身わな／＼打ふるひ、父の容子をそと見れば、拳を固め眼を見張り、胸突出して待居る様の物凄さ、花枝は思はず顔を背向けぬ。

長助椽端へ畏り、た、た、只今歸りまして御座りますと、息苦し氣に唾を吞めば、フム、大儀であつた、左源太殿の安否は分つたか、どうぢや、察する通り戦死なされたかと正右衛門膝を進ませ、長助、どうぢやと言葉を疊み、返辭を促がす短兵急。花枝の胸は愈々躍りて、今長助が只一言、其一言が氣遣はしく、死んだと聞たい逆様の苦しき思ひに心は亂れ、聞きたくもあり、聞きたくもなし、エ、どうしたらと焦燥居しが、長助返辭を急がれて、呐りながらも口早にど、同志の方は四十七名、ご、御一名も討死は御座りませぬ。ナ、ナニ、討死は一人も無いとは、し、然らば左源太殿はと正右衛門、息をはずまし鋭く問へば、ハツ、左源太様はいかゞ遊ばされましたか、わたくし一散に馳けて參り、多くの見物人を押分け馳ぬけ、同志の方々が、い、今や六間堀通りを靈岸島へお出ましになる處へ追つ付きまして、そ、それから鐵砲洲へ掛り、稻荷橋を渡りて、た、内匠頭様御舊館の後へお繰り出しになるまで、先きになり後になり、一々四十七名のお顔を窺ひましたなれど、左源太様はお見受け申し上げませぬ、こ、こ、これだけの事では、わたくし不念の越度もあらんかと存じ、同志の御一人一番後からお出になりました、槍印にお記になつた御姓名は確か、寺坂吉右衛門様と申上げる方で御座りましたが、こ、この方に伺ひましたところ、御同志の中には、六郷左源太様と仰しやる方は無いとのことで御座りますと

憚りもなく言ふ其口元の、子細らしきが憎くて憎くて、聞居る花枝は赫とのぼせて、身も世もあられず消えも入りたき思ひ苦しく、身ぶるひしつゝ泣き沈む。

正右衛門血相變りて立上りて、よし分つた、休息せよと厳しく言ひ棄て、ひつしやり障子を荒らかに閉して、其處へどづかり投げ出すやうに坐つたまゝ、しばしは物を言はずき。

(十七)

は、花枝と、聲音ふるはし呼かけて、正右衛門熱き涙をはら、溢して、どうぢや、花枝、そ、そなたは、悔しうないか、哀しうないか、わ、わしは腸が斷れるやうぢや、同役や朋友が淺野家騒動の話しを仕出し、家臣等はどうして居るであらう杯と言ふときは、そ、それを明白には言はねども、どうせ黙つては過すまじ、いづれ吉良殿をと、われ先づ答へて、婿六郷左源太素より同志の一人と、言はぬは言ふに勝るわれが言葉を、誰れも彼れも推察して、此間から内々の噂、此復讐の目論見あるを語り合ふ時、神川氏はよく御存じであらうとほのめかした人々に對して、わわしは再び顔が合されぬ、さうぢや五平にまで面目を失ふた此心の中、花枝、察して呉れ、正右衛門今年六十に相成るまでまだ、一度

も人に面皮をかいた覚えは無いに、エ、あの左源太殿の腐れ武士、さ花枝あんな腐れ武士には、もうくそなたを添して置くことは出来ぬ、こ、これがわたしの子なれば、詰腹切らせて、切らずば手討にするものを、他人ぢや仕方がない、若しものめめ歸つて來たなら、縁を切つて逐出して仕舞ふと、切齒をなして罵りつゝエ、此上下、何の爲めにつけた上下ぢや、上下の手前も恥かしいと、かなぐり棄て身悶へして、狂氣の如くに怒り哮りぬ。

其お腹立は御尤も、其お言葉は道理で御座んす、妻のあたくしも今更に、愛想のつきた夫の根性、エ、悔しう御座んすも口の内、花枝はギリ／＼齒を噛み鳴し、胸のつかへを左に壓へ、父の怒りを見る眼がつかく居ても立ても居られぬまゝに、其場を立て廊架へ出た手で、轉ぶが如く居間に這入て、わつとばかり泣き伏しぬ。

正右衛門は氣分惡しとして、侍女に床を取らせ、朝餉も食す臥床に入りぬ。それを聞ては、花枝は我身を切らるゝ思ひ、食事もなか／＼喉へ通らず、泣いてくゝ泣き暮して、孤燈一點光淡く、次第に更けゆく夜と共に、心は段々打沈み、紛れ亂れし思ひの絲を、一つ／＼我から解て、わが事、夫の事、偕て何とせばよからんかと、獨りつく／＼考ふれば、そもや十八の其昔し、縁ありて左源太殿に嫁きし花燭の夕、鴛鴦の衾の新枕、主は百歳、

妾は九十九、俱に白髪の尉と姥、其末までも變らじと、確かに誓ふた言葉もあるに、いかに夫の振舞が武士たる道に背けばとて、妾は女の道棄て、なんで今更別れられよう、君君たらずと雖、臣は何處までも臣たらざるべからずと、お父様が常々の御教訓、夫に夫たらぬ行ひあらば、妻も習ふて道に背けと、眞逆仰しやることも出来まじきに、左源太殿には添して置けぬと情けない先刻のお言葉、エ、胴慾な、胴慾な、何故あんな事仰しやつた、一徹短慮の御氣象とて、一時の怒りに御心狂ひ、心にも無い行掛り、ついあんなことを仰しやつたのか。兎ても角ても、夫婦の縁をわれから切て、不義の夫はどうでもなれ、妾は高見の見物と、雲吹き拂ふた月同様、すまして、居られるものでもなし、夫の心が曇るなら、曇りに添ふて何處までも、死に行く二世の後までも、末を遂げるが貞女の道、さア其貞女を立てんとすれば、お父様には不孝となる、孝を竭せば貞ならず、貞を竭せば孝ならず、孝と貞との二筋の、繩にからまる心の苦しみ、思ひは二つ身は一つ、エ、どうしようとは花枝は身悶へ、さるにても夫はどうして居給ふぞ、生きて此世に居給ふが、もうく寧ろ怨めしい、今にも歸つて來給はゞ、妾は其時何としよう、それよ、十五日には歸つて來るとの豫ての言置、其十五日は今日なるに、エ、どうしようぞ、どうしようぞと、又も亂るゝ思ひの絲、泣いて疊へすり付けし鬢の亂れと諸共に、紛れくゝて果てしなし。

(十八)

お父様が先刻の御立腹、左源太殿が、若しも我子であるならば、詰腹切らせて、切らさば手討にするとの仰せ、實に御尤もなお言葉と、妾も此時感じたりき。それよ、いかなる天魔に魅入られてか、忠義の道を踏外し人にして人ならぬ畜生道に墮落した左源太殿、身體はよしや浮める雲の富貴に生れて居給ふとも、心は正しく腐り果て、最早眞の人では無きに、ア、其眞ならぬ人に事へて、妻の花枝で生涯暮して往れうか、暮して往くは道で無し、さりとてお父様の仰しやる如く、夫婦の縁を切るといふは、愈々道理でなきものを、さらば妾はどうしよう孝と貞との板挟み、免るゝ隙なき我身の上、所詮生ては居られぬ場合、死して諫めし昔しの人を心の手本、オ、さうぢや、筆に心の丈を言はせ、道理を責めて夫を諫め、其書置を遺品として、妾は自害と雄々しき覺悟、斯くて妾の眞心通じ、夫が其身の罪を悔ひ、昔しの六郷左源太吉高殿に立歸りて、立派に切腹し給はゞお父様には孝となり、左源太殿には貞となり、妻たり子たる道は立つ、さうぢやさうぢやと打點頭、今朝しも夫の遺言を聽かんが爲に着更へたる、此下重ねの白無垢が今宵は死出の晴衣裳、エ、これが浮世か情けなや、いで、いで、書置認めんと、硯引寄せ墨摺流し、卷紙ひろげ、

筆咬しめ、ふるふ手先に筆執つて、眞心絞る筆の跡、其水莖の墨の色、薄き縁と今更に、憎や涙の溢れ出て、筆の立所の見えぬまゝ、思ふやうには書けもせず、自狂て筆止め又思案、同志の方は四十七名、五平長助兩人とも、其四十七名の中に、左源太様は見えませぬと、きつぱり返辭はしたものと、まだ公けには知れぬ事、四十七名が總ての人数であるやら、此外にもあることやら、それよ、寺坂吉右衛門とかいふ同士の方の一人に、左源太殿の事尋ねて、そんな人は無いと聞たとは言へ、平生から粗忽な長助、其言葉が當にならずよし又同士四十七名行列の中には洩れ給ふとも、外に大役引受けて、いかなる働きし給ひしか、それも今では分らぬものをあのお父様の一徹短慮、下僕二人の返辭を信じて、偏に左源太殿を同士の外の不忠者と罵り給うお言葉に釣られて、妾もさうと覺悟はしたれど、さるにても十二日の朝から出て、丁度昨夜も歸り給はず、今尙歸り給はぬつゝ、無い夫の振舞、思ひ廻せば何やら子細があるらしいに、それも究めず早まるは、思慮なき業ぞと氣がついて筆投遣りて、しよんぼりと、燈暗うして數行虞氏が涙の様あはれなり。

とは思ふものゝ、左源太殿が、酒に亂れて歸り給ひしあの爲體、特に一子相傳貞宗の一刀をも賣り給ひし事考ふれば、矢ッ張りお父様の仰しやる通り、腐れ武士になり給ひしが眞實なるか。善か悪かの判断に、いづれあやめとわづらひて、花枝の心は先へ行き後へ戻りつしども、思案に餘りて居るところへ、且那樣が召しますると、侍女小露の報知あり。

(十九)

神川正右衛門は臥床の上に起直りて、おづ／＼入り來る花枝の顔をぢろりと見やり、花枝、これ見よと、先づ疳聲の調子高く、文字細かき一枚紙を投げ出して、そ、それはな、淺野家の忠臣、吉良上野介を討取て、末代までも武士の鑑と讃へらるゝ四十七士の姓名ぢや、大石内藏介殿より寺坂吉右衛門殿に至るまで、ずらりと並べた名書の中に、口惜しいは、六郷氏の名前がない、見よ有るまいかと、點せし燭臺押し出し、きらつく眼で花枝を見詰め、ふるふ聲音に力を入れて、そ、その書付は只今神田紺屋町の堀内氏から、態々の使を以て報知て呉られたのぢやが、六郷氏の仲間外れを、さすがに氣の毒と思はれたかこ、この手紙に、斯ういふことが書いてある、「六郷左源太殿には、子細ありて同志を洩られ候趣、容子は追つけ相分り申すべくと存じ候」、子細とは、どんな事かは知らぬけれど、何れ命惜しさに腰抜けとなつた位のことであらう、そんな容子は、今から分つて居るに、堀内氏も氣の長いことを言つたものぢや、さア、もう其通り、六郷氏の腐れ根性はつ

きり分つた上からは、花枝、そなたも覺悟するがよい、老耄ても神川正右衛門利金、左様な男に、片時たりとも娘を添はしては置けぬ、エ、何を泣く、何が哀しい、そ、そ、そんな腐れ武士に未練が残つて、それで泣くのか、馬鹿め、確かりせよ、確と覺悟をせよ、そ、そなたも正右衛門の娘ぢや、武士の娘たる覺悟はあらう、今にも六郷氏が歸つて來たら、立派に夫婦の縁を切れ、必らず未練な振舞すな、好いか、若しも愚圖々々するやうなら、わしが出向て埒を明けて遣はす、切れ、切れ、縁を切れ、家の名折にならぬやう、夫の爲めになるやうに、好いか、分つたかと、何やら綾ある其言葉、不思議や眼はうるみ來て聲も、初頭の元氣なく、やがてごろりと横になり、分つたならば夫れで好い、わしはこれから寝る程にと背向になりて打臥しぬ。

若しや若しやの疑ひも、慾目で作りし迷ひの雲も、晴れて悔しき夫の不忠、四十七士の連名を、見る眼涙に霞みつゝ、儘になるなら此中へ、夫の名前の浮て出て、夫それと人に見えよかし、エ、羨ましい此人々、此人々の妻達は、嘸や嬉しいことであらうに、其嬉しさには引かへて、妾が今の此哀しさ、エ、もうどうしよう、どうしようと、胸も張裂く苦しみに、父の言葉もよくは分らず、ハイ、ハイ、畏りました、宜しう御座んすと夢中で答へ、心も空に我居間へ歸りぬ。

居間へ歸つて又泣いて、不圖思ひ出す堀内からの手紙の文句、「子細ありて同志を洩られ」、「容子は追つけ相分り申すべく」とは、どんな子細で、どんな容子か、お父様の仰しやるやうに、命惜しさに腰抜けとなつた位のことならば、左も意味ありさうに書立て來る筈もあるまじきに、どうも不思議と小首を捻りて、イヤ／＼これも慾目の迷ひの雲、何れにしても夫は最早腐れ武士、所詮昔しの左源太殿ならず、先刻覺悟を定めた通り、さうぢや、さうぢや、夫へ意見の書置残して、二十四歳を一期の花、いざ潔く散らんものと、花枝再び巻紙取つて、筆さんとするときに、エ、何とせし、五平の聲でいつもの如く、御新造様、左源太様のお歸りて御座りまする。

(二十)

エツと驚きのぼせ上りて、何と返辭も出ざるまゝ、黙つて椽の戸引明くれば、左源太熟柿の息噴かけ、ウキー、酔ふたぞ、酔ふたぞ、今日晝から飲みつゞけ、飲むで、飲むで、ハ、ハ、ハ、身體が丸で綿のやうぢや、は、花枝、手を取つて呉れ、こ、こ、今夜は左源太我慢なことは申さぬ、ま、全く前後忘却、正に閉口仕つた、花枝、何を致して居る、そ、それ、此手を取て、ぐつと引上げて呉れ、はて、黙つてほんやり立て居るとは、情ない

ぞや、は、花枝、どうしたもののじやと怨み言、朦朧たる醉眼とろりと見張りて、骨の無いやうな手先覺東なく、椽板捉へ、それに縋りて、辛くも座敷へ上りしが、足の踏所の定まらぬまゝ、ばつたり雨戸へ突當りぐたりとしながらのめすり込み、大小さへも取らばこそ大の字なりの高躰、正體もなく眠りに入りぬ。餘りとしても情けなき夫の様に呆れ果て、思慮も亂れて左思右考、花枝ほんやり立居るを、五平見上て氣の毒さうに、御新造様、其處にさうして御座つては、風邪をお召しになりませう、今夜は強いお寒さでと、只何氣なく言ひなす言葉も、花枝の胸にははりさす如く、エ、情けない此夫、よくも斯んなに酔拂ひ、のめく、歸つて來られたものぢや、嘸や五平が心に晒ふて居るであらうに、エ、恥かしや悔しやと、涙の顔を振り仰げば、西に傾く望の月、まだ消え残る雪に凄く、睨むが如く眼を射るにぞ、はつと俯向き氣はわく、五平や、毎度御苦勞であつたのと、僅かに言ふて戸をびっしやり、花枝は其處へ伏轉び、しばしは空に泣沈みぬ。

心の底の其底の、堀内殿の手紙の文句、「子細あつて同士を洩られ」、「容子は追つて相分り申すべく」との其子細を、絶えし望の一縷の綱嬉しい便りもあらうかと、死ぬる覺悟の心の中にも、今の今まで繋ぎし望はふつつり断れて、切れて果敢なき夫の此様、さうぢや、さうぢや、先刻お父様の仰せられた言葉の綾、今つくづくと思ひ廻せば、「切れ、切

れ、縁を切れ、家の名折にならぬやう、夫の爲めになるやうに」とはどうかやら、意味があるらしい、はて、さうと氣づけば、今朝御立腹のお言葉の中に、我子であるなら、詰腹切らせて、切らずば手討にするとの仰せそれでは若しやと花枝は身慄ひ、そつと夫の寝顔を覗きて、エ、も妾はどうしやうぞ。

左様右様夫の心を疑ひ測りて、腐つた性根と定めしは、言はゞ此方の當推量、よしや四十七士の同士を洩れ給ふたとて、外にも忠義の仕方あるかは知れず、まだ一言も夫の口から、其お志を聞いたこともない今に、女心の淺智恵から、迂濶なことをしたあとで、臍咬悔があるならば、夫殺しの大罪人、エ、怖ろしやと、花枝は夫を見詰めしが、相恰崩れてだらしなく、涎垂らせたわいなさ、見るにむか、氣を立てて、エ、何の、何の、斯んな五體に、忠義の心の宿るものかは、若しやと思ふ我思ひは、矢ッ張未練の心から。エ、も未練をさらりと断て、オ、さうぢや、愚圖く隙を入れて居れば、お父様がお出になる、女でこそあれ神川の娘、左源太殿、お覺悟遊ばせと懷劍持つて摺り寄て、所詮腐つた其御性根では、覺して切腹お勧め申すはむだ、眠つて御座る其まゝで、地獄極樂何れへでも、さつさとお出遊ばしませ、妾もお供申しまする、生きて此世に恥面さらし、不忠者よ、不義者よ、腐つた性根のなまくら武士と、生涯人に晒はれ給ふ其御恥辱を、妻のわたくし、

よしや草葉の蔭からでも、どうでも見ても居られませぬ、あなたを殺すはあたくしの貞節
是非ない事と諦めて下さいませ、南無阿彌陀佛と口の中、懐劍の鯉口ぶつりと切て、花枝
ぢり、と詰め寄りぬ。

(二十一)

罪なき夫の寝顔見ては、さすがに脆き女氣の、定めし覺悟も今更に、身體と共にぐらつ
きて、さるにても只の一言夫に言葉を交しもせず、此一突が此世彼世の別れの餞別、さり
とては情けない、エ、残念なと齒を喰ひしめ、思はずわつと泣きかけて、其聲袖に押し包
み、ぢりぢり寄りて夫の顔、しげ／＼眺めて獻歎嗚咽、エ、もどうして又が當られよう、
呼んで覺して道理を責めて、御得心の其上で、さうぢや、さうぢやと獨合點、も、もし且
那樣と揺り起せば、眠つたまゝの寢惚顔なんぢや、誰ぢやと答へはすれど、生體もなきた
わいなさ。花枝で御座んす、だ、旦那様、確かりなされて下されませ、御了簡をお聞申し
て、夫れからお願ひ申すことが御座いまする、旦那様、確かり遊ばしてと力任せに二搖三
搖。ウム、ウム、なんぢやと、左源太うつすり眼を開けば、花枝は聲に力を籠め夜前四十
七名の御同士が、吉良上野介殿のお屋敷へお討入遊ばされ、首尾よく主君の仇を報じ給ふ

た天晴なお働きは、あなたもお聞き及びで御座んせう、何故あなたは其お仲間をお外れ遊
ばした、生命が惜しうてか、但しは外に子細があつてか、旦那様、其譯仰しやつて下され
ませと詰め寄るに、左源太寢返り大欠伸、ウム、同志の者が吉良殿を討たことは知つて居
る、わ、わしが仲間を外れたは、さうぢやの、命が惜しうてといふても好し、子細があ
つてといふても好し、さア花枝、そんな事はどうでも好い、わしはもう眠うて眠うて、
ウキー、どうも堪らぬ、許して呉やれとぐたりとして、軒の聲は雷の如く、揺れど覺ませ
ど再び起す、さながら死人の有様なり、エ、此態はどうしたもの、花枝も今は愛想が
つきて、譯の分らぬ今の返答、命が惜しうてといふてもよし、子細があつてといふても好い
とは何事ぞ、愚かな妻と侮りてか、あまりとしても曲の無い其お言葉、所詮腐つた御性根
は、焼直さねば直るまい、左源太殿、夫を殺す貞女の引導、南無阿彌陀佛を夢に受けて、
さア御觀念遊ばしませ。

母が遺品の來の國俊、するりと脱て逆手に取り、臙に照す燈火に、夫の顔をぢつと見て
片膝立て摺り寄て、エ、と身慄ひ息はづまし、あはや一突、エ、眼が眩む、胸は張裂く、
腕はたゆむ、血を吐く思ひの苦しさに、覺えず花枝は横に倒れて、どうしようぞ、どうし
ようぞ。廊架の外の物音に、花枝ははつと氣がついて、あれは確かにお父様、若しも愚圖

々々するやうなら、わしが出向いて埒を明けると仰しやツたに、エ、もう寸時も踟躕は出来ぬ、鬼になつてと起返り、眼は瞑り、心は幻、南無阿彌陀佛と、覺えず稱名高らに、懐劍きらりと閃めかし、夫の身體へのし掛りぬ。

(二十二)

待て、早まるな、わしは死ではならぬ身ぢやと、左源太聲音凜として、花枝の手を執り起直る。そ、それでは只今の生體なさは、酔ふたふりの偽で御座んすか、さうとは知らず無禮な仕業、旦那様、どう致しませうと、驚く花枝をぢつと見て、酔ふては居る、酔ふては居るが、さらばの時は此くの通り、左源太酒には負け申さぬ、花枝、其懐劍を鞘に納めよ、さすがは神川正右衛門殿の娘御、同士に洩れたわしの不忠を憤りて、わしを殺して貞を立て、身を殺して孝と貞とを立てるの覺悟、左源太感服致したぞと、ニッコリ笑みし面魂、自然と備る威儀堂々、驚き呆れる花枝より、此方に立聞く正右衛門、急ぎ戸を明け這入つて来て、容子は彼方で伺ひ申した、子細あり氣な貴殿の舉動、四十七士の同志を洩れて、何故死ではならぬ御身ぢや、左源太殿、其子細を承りたいと摺り寄れば、これはく、岳父殿、拙者の身につき種々の御配慮、お尋ねの趣は、明さで止むが男らしく、不忠不義

の腐れ武士と、いつく迄も人に哂はれ、一生涯を埋木に、朽果るのが拙者の本望成ることならば心一つに納めて置たい事では御座れど、岳父殿の御心中、花枝の胸の内、お察し申せば、左源太黙つては居られませぬ、死ではならぬ拙者の身の上委しくお話し申します程に、岳父殿にも花枝にも、よくよく聞いて下されて、拙者が胸の苦しみを、どうぞ察して下されませ。今は去年の三月十四日、主君御生害の凶變あつてより以來、斯く申しては憚りあれど、堀部氏の父子を始め、江戸勤番の家臣等に、大義を説て復讐の志を固めさせたは、即ち拙者で御座りまする、既に復讐の首唱者たる六郷左源太、何の命を惜しみませうぞ、第一番に吉良家へ討入り、上野介殿の首は、拙者必ず揚げんものと、勇みに勇むで一向其時を待僮れて居りしところ、去ぬる十一月二十三日の夜、大石殿より秘密の相談、たつた二人の對坐の席で、偕て頼まれた一條は、我等同志の幾人が先づ復讐の一番馳け、吉良上野介を狙ふては見ませうが、素より名だたる高家の歴々、特に上杉家といふ後見ありて、なか／＼以て手強き讐、首尾よく本望遂げらるゝか、但しは皆々無念の最期、怨みを呑むで犬死するか、實は見込がつき申さぬ、淺野の家來に骨ありと、其名の爲めに企つる事ならば、よしや我等がしくじつて、夫れ切り立消になりたればとて、素より構はぬ事では御座れど、貴殿を始め我等同志の一同は、念頭名聞の文字無く、偏へに亡君の尊靈を慰め

奉らんが爲、臣たる道を竭す次第で御座れば、我等一番馳の者がしく、いじつたからとて、夫れで止むべきものでは御座らぬ、其處で大石内藏介折入つて貴殿にお頼み申し上る、何卒貴殿二番手の大將となり、追て鬪引の上定めるところの二番手を指揮し、しばらく生延び我等のあとを繼で下され、内藏介は國詰、貴殿は江戸詰、掛違うてお交りは淺う御座るが、殆ど百人の同志の中、内藏介安心致して二番手の大將を託すべき方は、貴殿より外には御座らぬ、特には、我等一番手の同志の者で、首尾よく本望遂げたに致せ、公にしては、淺野の本家と上杉家との確執、惹て亡君御後室の御行末、私にしては、我等同志の者の父母妻子、死で行く身にも、なかく、氣掛りな事が多く御座る、されば貴殿若し二番手の御用なき節は、いつくまでも生きて下され、公私萬づの事に幹旋して、あはれ我等が心遺なく死んで行れるやう、何卒御盡力下されたし、貴殿を見込むでお頼み申すと、さ、此やうに、まだ生面の拙者に向つて、淺野家の礎石と、眼ある人には知らし大石氏が手をついては頼み口上、先づ一番手でしく、じる氣遣のない復讐に鬪引ならば是非もなければ、名指を以て二番手の大將とは、儲も情けない頼み事と、拙者も返辭に一度は躊躇致しましたが、赤心込めての大石氏の頼み、名聞離れた眞實の忠義を心の柱、夫れに凭れて胸を据ゑ、拙者承知の旨を答へ、其時個様の誓書を取交して御ざると、左源太懷中から一通の書面を取出し、

盟約の事

一大石内藏介良雄儀は、一番手の大將と相成り、其總勢を指揮仕るべき事
 一六郷左源太吉高儀は、二番手の大將と相成り、一番手返討に會ひ候節、更に二番手を指揮し復讐思ひ立つべき事

一一番手に於て首尾よく本望遂げ候節は、二番手は此世に長らへ、主家に拘はり候一切の事、又一番手遺族の面々救護の事等取計らひ申すべき事
 右の條々神明に盟ふて違背之れある間敷もの也

元祿十五年十一月二十三日

大石内藏介良雄□血判

六郷左源太吉高□血判

岳父殿にも御覽下され、花枝も見て呉れ、さ、斯う了簡を定めたものゝ、諸凡人の情けなさ、身を埋木にするのがつらうて、ついやけ酒のあの酔拂ひ、此後とても折々は、酔ねば堪らぬ時が御座らう。併し花枝、そなたに申した貞宗の一刀、これ見て呉れと、帶せし一刀すらりと抜いて、岳父殿にも御覽下され、こ、この曇りは、正しく上野介の血液で御座る、賣つたと申せしは、實は大石氏に預けた譯で、責めては先祖相傳の刀だけでも一番

414
166

手へ入れて呉れと頼み、刀だけは復讐の供をさせましたが、今朝我手に歸り申した。
岳父殿、花枝、この左源太が死ではならぬ子細は此くの通り、情けないことで御座ると
ほろりとして、イヤ／＼これも忠義の爲め、明日からは武士を棄ての俳諧師、六花堂雪香
で生て居る心得是非が御座らぬわい。

(完)

昭和十五年十二月三十日
昭和十六年一月十日

非 賣 品

發行者	西宮市甲陽公園 日本義道會本部 幹事長 羽室庸之助
印刷者	大阪市北區梅ヶ枝町九六 石橋昇
印刷所	大阪市北區梅ヶ枝町九六 弘文舎印刷所 電話北二八一一番
發行所	西宮市甲陽公園 日本義道會本部

終

